小さな感動物語

終業時間が過ぎて同僚がほとんど帰ったあとも、いつもふたりの同僚が残って黙々と働いていました。わたしはある日彼らに聞きました。「今は注文が多い時期でもないのに、どうして毎晩9時過ぎまで残業してるの？」。すると、ひとりが「上司が休みだから」といいました。それを聞いて、わたしは彼らの仕事に対する責任感の強さと熱心さに感心しました。八月、注文が少ない時期に多くの同僚が長期休暇を取ります。そんなとき彼らは無給で遅くまで残業していたのです。もちろん、不平をいったりしません。そんな彼らは合鞭生産管理課の梁婷婷さんと王亜萍さんです。上海合鞭生管課副課長　謝銀燕

「関心、関懐、関照」—心みんないっしょに楽しいひととき

スケートクラブのメンバー

花果山で記念撮影

ピアノクラブのメンバー

横笛クラブのメンバー

橋本さんと現場従業員たち

線材課の優秀社員が
董事長と記念撮影(天平山で)

送る　—　人生の輝き

ベッドに横たわる母。顔面憔悴で息絶え絶えに、それでも微かに呻きました。「苗苗、苗苗。苗苗が見える。彼女はあそこに。今行くからね」。愛する娘を亡くした母はもう十日以上、食事ものどを通りませんでした。たまに二口、三口食べては「わたしが食べたら苗苗も空腹じゃなくなるのね」といいます。こうして横たわったまま、目が覚めては泣いて、苗苗のところへ行くといいました。

苗苗さんの家族と董事長

まだみんな国慶節のにぎわいに浮かれていた2010年10月6日。合壁に入社してわずか半月の苗苗は方泰から会社に戻る途中交通事故に遭いました。オートバイの後部席に乗っていた苗苗は交通ルールを無視した車とぶつかり、その勢いで地面に叩きつけられたのです。そして9日早朝の4時に息を引取りました。いや、本当は神様がこの可愛い苗苗のことが好きで、天国に連れて行ったのかもしれません。オートバイから飛ばされたとき、苗苗は笑顔の天使となって光り輝くところへ向かい、そこできれいなウェディングドレスを着て幸せな生活をはじめたのかもしれません。

どうして苗苗は天使になって天国へ行ったと思ったのでしょうか。それは、彼女はとても大きな愛をもった少女だったからです。苗苗は汶川大地震と玉樹大地震のとき、自分のわずかな貯金を全部被災地の人たちに寄付しました。それに普段から節約してお金を田舎の両親に送っていました。両親にとって苗苗は目の中に入れても痛くない存在でした。しかし、もう彼女はいません。きっと神様がどうしても苗苗に来てほしかったに違いありません。

苗苗は今孤独ではないはずです。事故のあった日から、わたしたち合壁公司の幹部は苗苗を最後に送り出すため精一杯頑張りましたから。彼女の家族に対しても心を察して接しました。熱いスープや果物、ミルクを届けました。

今回の事故に対して董事長はすぐに全力で援助するよう命令しました。それを受けて幹部は1時間ごとに状況説明の報告をしました。10月14日上海に来た董事長は飛行機を降りるとその足で苗苗の実家を訪ねました。苗苗の父と兄、ほかの家族は董事長が来ることを聞いていたため、董事長が着いたときには家の外に出て待っていました。董事長は家の中に招き入れられました。そこで見たのはベッドの上で正常に話のできなくなった母の姿。そして抑えることのできない涙を拭いながら嗚咽交じりに事故のことを語る父の姿でした。苗苗の父は実は継父ですが、心から苗苗のことを可愛がっていました。何とも哀れな光景でした。亡くなったものは何も知らないのに、残ったものはいつ終わるか知れない悲しみの中でその痛みを感じているのです。

董事長はそこでこういいました。「お父さん、苗苗の火葬が済んだら、彼女の遺骨を持って合壁に来てもらえませんか。苗苗にもう一度合壁を見せてあげたいんです。彼女のことを送るたくさんの同僚たちに会わせてあげたいんです。それから、苗苗とわたしで撮った写真を燃やしてください。苗苗も心細くなることなく旅立てるはずですから」。これには驚きました。何故なら生きている人の写真は燃やしてはいけないからです。にもかかわらず、自分の写真を燃やしてくれという董事長はわずか半月だけの社員だった苗苗のことを心から気に掛けているのだと思いました。苗苗の家族もこれを聞いて思わず感激の涙を流しました。

事故発生後、加害者は冷たく、人の命を奪ったことにも反省を見せず、また遺族のもとへお詫びのあいさつにも来ませんでした。彼は今後必ず社会的な制裁を受けることでしょう。それに対して合壁は最後までできる限りのことをしました。「関心、関懐、関照（気配りと思いやりで接する）」という考えを貫いたのです。数々の場面が目の前に浮かんできます。

事故発生当日、このニュースを知った林経理と施経理は食事中でしたが、途中で箸を置いて病院へ駆けつけました。直接の上司の劉副理と周課長も次々と後を追いました。あのとき手術室の外でみんなで祈った場面。陳総経理、副総経理、陳工場長ら会社の重役たちが何度も苗苗の実家を見舞いに訪れた場面。董事長の息子の奥さんが温かいスープとおかゆを持って苗苗のお母さんを見舞った場面。林経理が事故処理のために交通警察へ走った場面、弁護士と連絡を取った場面、精神衰弱になった苗苗のお母さんのために精神科の病院を探した場面、1日2回苗苗の家へお見舞いに行った場面、多くの人を連れて何度も遺族のお見舞いに行った場面、いくつもの処理しなければならない問題をきっちりと処理していった場面。李海躍ら同僚が自分で作った食事を苗苗の家まで届けた場面。李峰運転手主任が何度も車を飛ばした場面。上海、台湾、日本の合壁の同僚たちが愛の手を差し伸べて募金を行った場面・・・・・。これらさまざまな場面はすべて合壁の精神を象徴しています。

感謝のあいさつを述べる苗苗のお父さん

「感謝報恩、回饋社会（感謝に報いて社会に報いる）」。これは単なるスローガンではありません。わたしたちが実際に行ってきたことです。わたしたちは誰もがうらやむ家族です。温かい心を持った家族です。そして合壁公司は企業の中の輝く模範です。ですから、病院で医者は驚きと賞賛の眼差しでわたしたちを見ていたのです。苗苗の家族が泊まったホテルの従業員はわたしたちに向かって親指を立てて感動を表したのです。苗苗の家族は感激の涙を流したのです。

安亭外経委の邱模主任：本件では積極的に各所に連絡を取って緊急処理に当たってくれました。合壁公司から最高の感謝と敬意を捧げます。邱模主任のおかげで人の輝きを信じることができました。

嘉定交通警察隊第七中隊徐軍警官：本件に携わったときから終始徹底して事故の追跡調査をしてくれました。どんな言葉をもってしても感謝の気持ちを表すことはできません。

最後に苗苗のために祈りを捧げます。彼女が安らかに眠れますように。そして彼女の家族の悲しみも時を経て和らいでいきますように。

上海合壁　総務課　李高燕特助

HOPPY

合壁流

不斷地思考與行動
誠信蛻變創新卓越
創造價值共生共榮
感謝報恩回饋社會

2010/11
第5期　11月10日發行

出版社：合壁文化基金會　發 行 人：詹其力　編輯指導：陳慶煜、詹杰文
總　編：王迎春、林生富　編輯委員：吳桂喜、李高燕、劉　仙　印　刷：上海綜禾印刷有限公司

印証（互いの証明）--董事長の知恵観

董事長の「禅の5S」と鍵山秀三郎の「掃除の謙虚」
董事長の第2.5次産業と2年後に馬英九が強化を呼びかけた台湾の第2.5次産業
董事長の新工場に植えた苗が台風で倒れないように支えろと幹部に怒鳴ったことと今の樹木の青々とした姿
董事長の「関心、関懐、関照（気配りと思いやりで接する）、同心、同歩、同調（同じ心と同じリズムでともに歩む）」と重慶役人の「三進三同（貧困農村で生活する）」
董事長の「朝の運動」と上海工場中年幹部の健康
董事長の百回に及ぶ従業員との活動と重慶役人の「10回7日30日（年に10回は貧困農村に入り7日から30日過ごす）」
董事長の「簡素な喜びに幸せを感じる」と重慶役人の「貧困農村を訪れる」
董事長の「知恵、悟り、行動」と陳定国の「知恵、功徳、成就」
わたしは董事長が鋭い洞察力と秀でた先見の明を持つこと知っています。

董事長と記念撮影をする林経理

わたしが董事長の知恵について感じたのは新工場建設中のことでした。そのとき董事長とは電話で連絡をとっていましたが、よく急に質問されました。後になってわかったのですが、これは董事長独特の、わたしたちに知恵を使うよう啓発する方法だったのです。董事長は質問でわたしたちの怠け心を戒め、その後も追跡の電話でこれを確認しました。わたしたちは忙しくなりました。しかし、最後に満足な結果が出たとき、いつも董事長に感謝しました。

お客様の来訪時、わたしたちはいつも万全の資料を準備しているつもりです。しかし、董事長はそれでもまだ不十分なところはないかとわたしたちに注意します。そして、改善できるところを改善します。ときには「厳しい指導」を受けることもあります。しかし、董事長がお客様の前で自ら準備した資料を取り出すのを見たとき、改めて自分の足りなさに気付くのです。ある年、三葉株式会社の奈良取締役が我が社を訪問したときのことです。董事長は25年前に当時の日野社長が董事長の奥さんに贈ったバッグを彼らに見せました。お客様はびっくりするとともに、とても感心した様子でした。これを見て、わたしはサプライヤーと顧客の間の強いつながりを感じました。こういうつながりがあったからこそ、わたしたちは40年間毎年発展を続けることができたのだと思います。

董事長のもうひとつの知恵は「仁」の実践です。董事長は幼少時代世話になったおばさんに毎月5000台湾元を、彼女が亡くなるまで28年間にわたって援助しました。また、小学校時代に塾の学費を30元引いてくれた先生とその家族を何度も海外旅行に招待しました。そして温泉で自ら先生の背中を流しました。このとき先生は「仰げば尊し、わが師の恩」を忘れない董事長の態度に感動して涙を流したのです。30年前、阿進という社員が心臓病を患ったとき、手術しなければ命がないと知ると、たいへんな費用がかかるにもかかわらず、董事長はすぐに医師に手術を頼みました。また、社員の給料が払えないときは、質屋でお金を作って払ったとのことです。魯迅は「本当の士は血を正視できる。人生の悲惨な局面にも直面できる」といっていますが、董事長の行動はまさにこれに値します。上海に工場が完成してからはこの類の話は枚挙に暇がありません。守衛の黄保仿さんの父と兄が交通事故に遭ったときの手術費用の援助、電気工金茂伍さんの娘がリンパ癌にかかったときの費用援助、言語障害をもつ従業員李広東さんの人生を変えたこと、交通事故に遭った滕燕さんの父を助けるよう病床から電話で指示したこと、今年4月に全社員一致団結して袁英さんの心臓病の手術を成功させたこと・・・・・。大きなこと、小さなこと、董事長の温かい仁愛の心は従業員の家族や母校の校長先生にまで伝わっています。

キリスト教に聖書があり、イスラム教にコーランがあり、仏教に仏典があるように、わたしたちにも貴重な宝典があります。それは合壁の価値と経営理念を伝える「深耕企業文化、創造経営特色」です。董事長はこの刊行物を、時代に合わせた修正を加え根気よく伝えることで合壁の精神文化や理念の代表作にしました。また、「合壁流」の発行によって董事長の精神文化や理念がさらに価値ある物となりました。従業員やその家族、学校の先生、仕入先や得意先、政府の役人に至るまで、みんながそれに感動し、それを受け入れたからです。彼らが感動したのは合壁の企業文化、そして董事長の仁愛の下にある合壁の魂です。彼らが受け入れたのは高い次元の精神理念、そして愛で賊う董事長の強い気持ちです。

「目標を高く持ち、普通の人たちとの縁を大切にし、簡素な喜びに幸せを感じる。広い視野に立って安定を求めれば事は成しやすい」。わたしは2年前から董事長の人生哲学を解説しています。なぜなら、これはわたしにとって必要であるとともに、将来の合壁の基礎となるものだからです。

「目標を高く持ち、普通の人たちとの縁を大切にする＝感謝に報いて社会に報いる」、「簡素な喜びに幸せを感じる＝節約の生活。基本を大切にする。質素。富のために仁愛を捨てることや権利主義を憎む」、「広い視野に立つ＝先見の明。遠い視野。物事に早く気付く」、「安定を求める＝富んでも飾らず、心を落ち着ける」、「事が成しやすい＝よい縁を結ぶ、天地と縁を結ぶ、善行と縁を結ぶ、心を広く持つ」。このように素晴らしく、謙虚な考えは知恵と仁徳の化身といえると思います。

人は現状や自らの習慣を変えることを好みませんが、知恵の前ではどうにもなりません。董事長は「厳、慈、仁、愛」でわたしたち800人の合壁従業員とともに頑張っています。董事長が一早く何かに気付いて事を行い、重慶市政府がそれに続きます。では、董事長の下にあるわたしたちはどうすべきでしょうか。

過去の成長過程を振り返ったとき、わたしは時間の経過が速すぎると感じます。この速すぎる中国式発展のリズムにわたしはついていけそうにないと思うこともあります。しかし、幸いにも董事長がいました。董事長の知恵がありました。これによってわたしは明るい光を得られたのです。今、わたしはまだ見ぬ道を見たような気がします。わたしは強い信念でこの道を堂々と歩いていきたいと思います。

董事長の教訓に感謝します。

上海合壁マネージャー　林生富

利益の創造は企業の經營過程、「價值創造、共生共榮、感謝と恩返し、社會への還元」、これこそわたしたちの最終目標。